

第1章 戦場

従軍生活

食糧も、自由もなかった厳しい生活

島崎一枝さんのお話から

私の若い時代は軍国主義時代でした。

昭和十四（一九三九）年に主人が軍隊に召集されまして、旭川の師団に行くことになりました。当時、主人は旧制の札幌第一中学校（現北海道札幌南高校）に勤務しており、そちらのプラスバンドに見送られて出征しました。以来、私は陸軍糧秣廠の幼稚園で保母としてお子さんと一緒に毎日を暮らしておりました。

実は、私は、学校を出てから従軍看護婦の試験を受めました。従軍看護婦というのは、戦地に行つて、けがをされた兵隊さんなどの面倒を見るのです。私は、その試験に落ちました。体重が足りなくて、背が低かったからです。戦争に行つていいる兵隊の面倒を見るのですから、体重も身長もないと兵隊の面倒を見られないわけです。それで、陸軍糧秣廠の幼稚園に入りました。後で考えると幼稚園の方が幸せでした。

幼稚園では、陸軍糧秣廠で働いているお母さん方のお子さんを預かっていました。決まった時間から時間まできちんと働きます。軍というところは大変厳しいところでした。軍では必ず敬礼をします。門を入れて、陸軍糧秣廠という役所に入るときには軍人さんが立っており、私は四十五度の角度でお辞儀をして、ちゃんとごあいさつします。そういう厳しいところでは、

着るものは、はかまです。そして、見習い士官が毎日見に来ます。保母の教育が良いか悪いかを見に来て、保育日誌に全部目を通すのです。そして、必ず注意をされます。見習い士官が入つてくると、怖くて、黙って頭を下げました。

○糧秣廠 兵士の食料や軍馬の飼料を管理した陸軍の部署、工場のこと。本廠が東京に置かれ、国内では札幌・大阪・広島に支廠が置かれた。

○従軍看護婦 戦場で野戦病院などに勤務した看護婦。原則として敵味方の区別なく看護する。

○配給 米やみそ。砂糖等の食べ物などの物資を、生活に応じ、平等に割り当てる制度。

○粟 粟だけを炊いたり、粟粥にして食べていたが、現在は米に混ぜて炊いたり、粟おこしにするなどで食べる。

○イナキビ そのまま炊いて粥にして食用にしたり、粉にして餅や団子などにしたりする。きび団子やきびもちとして使われている。

○盧溝橋 日本語読みで「ろこうきょう」

○大東亜戦争 昭和十六（一九四一）年十二月八日、日本政府はアメリカ、イギリスとの開戦後、そ

陸軍の幼稚園といっても、食べるものは配給制度で、そんなにたくさん頂けるわけではなかったのです。軍人にはお米を食べさせられるけれども、幼稚園の方は粟やイナキビなどをいただきました。そして、ヨモギのおひたしやヨモギだんごを作ったり、ウドを取ってきたりしました。今のように、食べたいものを何でも食べられないのです。戦争をする兵隊さんが大切だから、食べるものは苗穂から貨車で戦地へみんな持っていくのです。軍の関係にいるからといって、何でも十分あるということではなかったのです。

幼稚園のお子さんがどこかで転んだり、頭をぶつけたというところ、軍に医務室がありました、そこに連れて行って診ていただきます。そういう処置を早くするということのも私たちの役目でした。何事もなく幼稚園を立派に卒園し、小学校に入れるようにする責任が保母にはあったのです。保母の教育も大変厳しかったです。

それから、今はピアノがあります、その頃は、足踏みオルガンです。「どんぐりころころ転がって」「夕焼け小焼けの日が暮れて」と、子どもたちは喜んで歌ってくれました。他には、縄跳び、お手玉などをして遊びました。

昭和十二（一九三七）年七月の盧溝橋における銃声一発で日中戦争が始まり大東亜戦争に拡大しました。その戦争が昭和二十（一九四五）年八月十五日に、当時の天皇陛下のご裁断により終結したわけです。

戦争というものは、するものではありません。当時は、



イメージ図

戦争中の幼稚園児

食糧も、自由もなかった厳しい生活

れ以前から継続中だった日中戦争を含めて、「大東亜戦争」(大東亜とは東アジア・東南アジアのことと呼んだ。これに対してアメリカ側では、対日戦争を「太平洋戦争」と呼び、戦後の日本でもこの呼び名が定着した。

○裁断 物事の善悪・適否を判断し決めること。

○軍事郵便 戦争中に、戦地などにいる軍隊や軍人、軍属から出される郵便。また、彼らあての郵便のこと。郵便は無料だが、内容は必ず検閲された。

○ソ連 大正十一(一

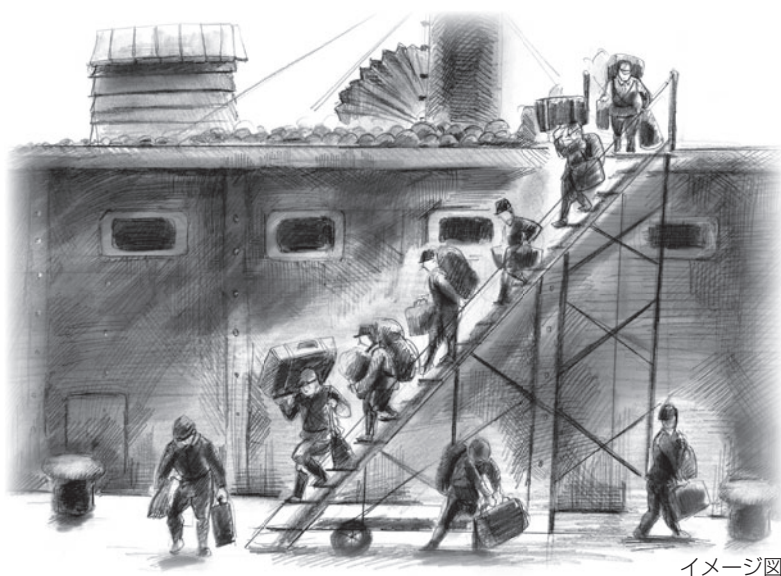
今のように自由ではなく、汽車に乗りたくても切符も買えないのです。親戚に何か不幸があっても行けない時代なのです。そういう時代を過ごしてきました。昔は、机も、いすも、立派なものではありません。台に板を乗せて座るものでした。

また、当時は、おしゃべりすることも何でもいいというわけではないのです。言葉を考えてしゃべらなければならぬ時代です。戦争をしているのですから、秘密を守るため、軍のことや軍人さんのこと、国に関することを言っはけません。あの将校がどうだ、この兵隊がどうだという批判や非難をすることができないのです。ましてや、軍に勤める身であれば、何かを言う前によくよく考えなければなりません。

そういうときですから、お手紙を出すのも、当時の軍事郵便では、検閲といって、軍が手紙の内容を確認してから送られるので、手紙にも勝手に好きなことを書けないのです。「お元気ですか、お変わりないですか、ご両親はいかがですか」というようなことはいいのですが、戦争に差し支えるようなことは書いてはいけません。私が手紙を出すにしても、検閲を受けなければ届きませんし、主人が向こうから出す手紙も検閲を受けないと着かないのです。

昭和二十(一九四五)年の終戦になりました、肩の荷がおりてほっとしました。

主人は、八年も戦争に行っておりまして、最後はソ連に



イメージ図

ソ連の収容所から帰ってきた人

九二〇年、世界初の社会主義国として成立した連邦国家。平成三（一九九二）年に連邦が解体し、現在のロシア、ウクライナ、カザフスタンなどの国々に分かれた。

○舞鶴 京都府北部にある市。引揚船が入港した。

抑留されました。戦争が終わっても帰って来られません。終戦になって、自分の部下を七十人船に乗せまして、日本に連れて帰るのだと言って喜んだのですが、なんと着いたところはソ連でした。毎日、山で木を切ったり、食べるものも十分ではなかったりと、兵隊は苦勞されたそうです。

いかに戦争というものが人を泣かせることになったのでしょうか。泣かせるだけではありません。戦争が終わった後も帰れないのです。昭和二十年に戦争は終わりましたけれども、昭和二十三（一九四八）年に舞鶴に主人の仲間だった三人の将校が帰ってきて、やっと戦争が終わったのです。

戦後六十六年もたち、敗戦の焦土から立ち上がった日本は、世界有数の経済大国になりました。平和な文化国家として成長し、世界の注目を浴びるようになりました。

しかし、静かに考えてみましょう。この平和になった陰には数多くの兵隊が犠牲とされているのです。犠牲とされたご家庭もたくさんお有りだと思います。青春のすべてをかけて戦争に身を差し出した方もいるのです。私たちがこうして幸せなのは、そういう人たちのおかげだと私はいつも考えます。そうした尊い歴史を忘れてはならないと思います。

皆さんは、これから元気に成長されて、この大切な日本を背負う人だと思っております。まず、平和であること、仲良くすることが大事だと思います。皆さんそれぞれのいいところを探しましょう。お友達のいいところを探しましょう。

DATA

平成23年度北区平和事業
聞き取り
・平成23年10月13日
・和光小学校



島崎一枝(しまざき・かずえ)さん

・大正6(1917)年生まれ
・札幌市北区在住

食糧も、自由もなかった厳しい生活